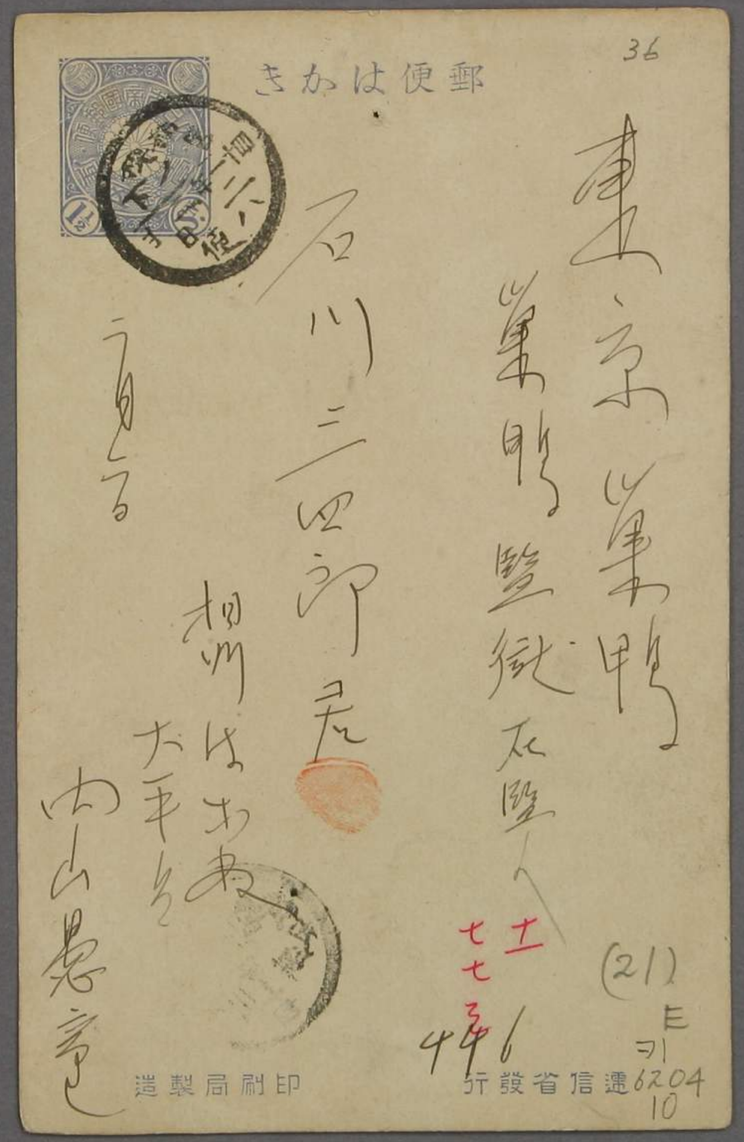
郵便はがき
36
東京巣鴨
巣鴨
豊島獄
石川三四郎君
相州はだの
大平方
内山愚童
(21)
土
七七五
446
印刷局製造
逓信省發行

昨年は色々と御世話になつたを有難く存じます。

しかし本年の7月は例年よりよつぽど暑い方だ。

此分では二月の寒さが案じられる。出来給へ大

の様子をして二月の坂を越してしまへ。

この坂を越せば三月野に咲く響が大きく

だす。寒のさを言へば、昨年の暮より世話

丈人の注意とまかせて世話したお礼ならん

十二月の末から鳴きだして、本人の机の傍より

盛に鳴き居る。（三響先生に無味を展望居る）

こゝを思ふと自然と云ふ感覚より も僕は

人為的に駆制されて早く自由の世界より

したしまる。経済界の自然の成行なと、

云ふて居れない。三月より的く為を十二月より

鳴かせることが出来るものを、いつまで望未家

と為仰者の暗闘をつゞけるをは僕には見て

居れない。只しく出撃行動、全速力を

以て、此自由の勝利を得ればよろしく、

そはとゝかく、僕の三響を世は先きに立つて意を

理想となつて来た。無暗に荒廃々々と云へ

国家の虚勢を張るよりも、本想意よりて

居るほうしく為つ、僕の方も本年鶴が二羽

居つて日に卵を生んで居る。それと犬が二頭

これ等不時の客を慰め得るのである。

いま朝の飯を喰つて、君と山口君に二月の

通信を書いた所である。寒さに侵されたぞうで

ある。